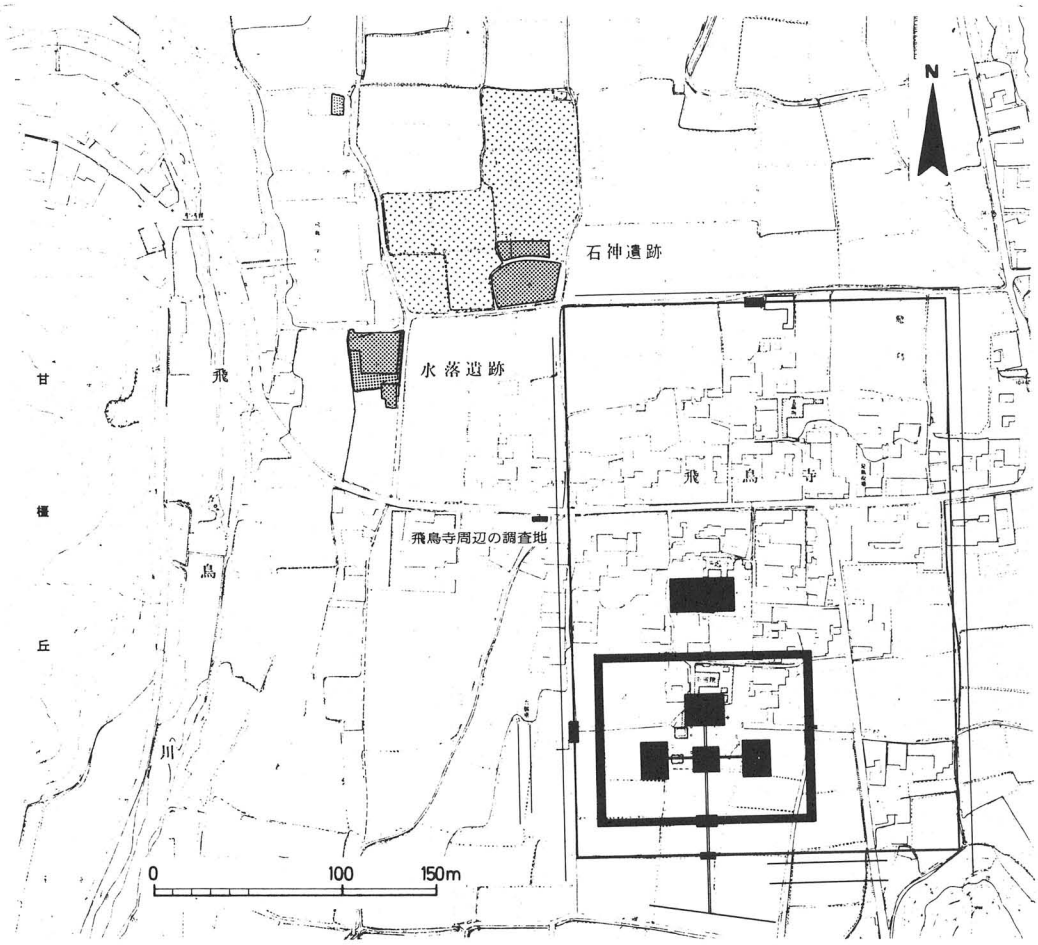
飛鳥浄御原宮推定地の調査

（昭和56年９月～昭和57年１月）

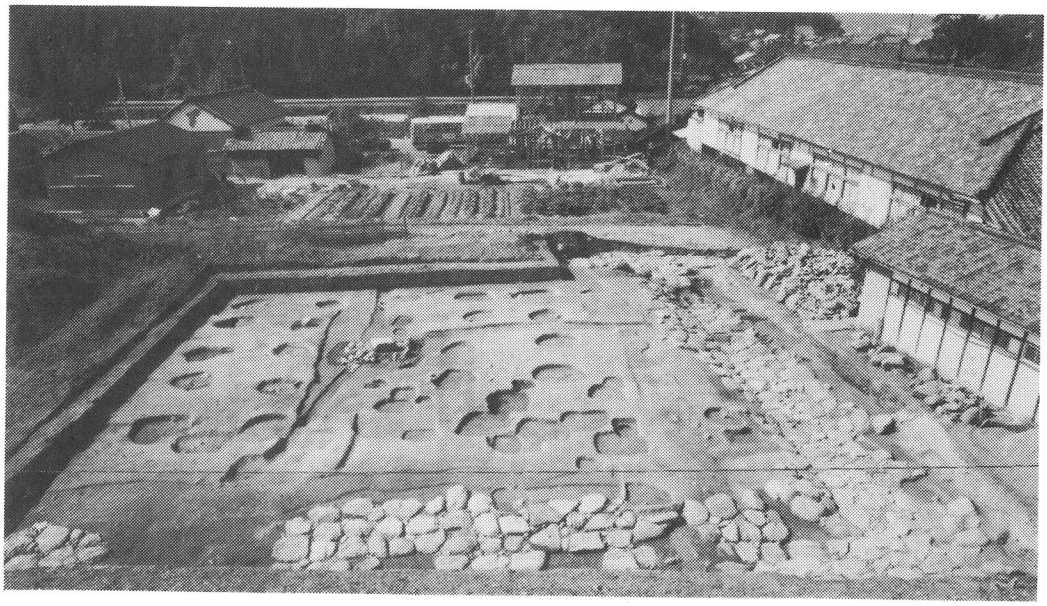
飛鳥寺の北方の飛鳥浄御原宮推定地では，これまで二，三の部分的な調査を除き，本格的な調査は行われていない。しかし，近年の飛鳥地域における調査成果から，その調査に多くの期待が寄せられている。そこで今年度より同推定地解明の糸口ともなる小字「石神」の水田（石神遺跡と仮称する）の調査を開始した。また今年度は，昭和47年に発見された史跡飛鳥水落遺跡の整備に伴う調査を合せて実施した。



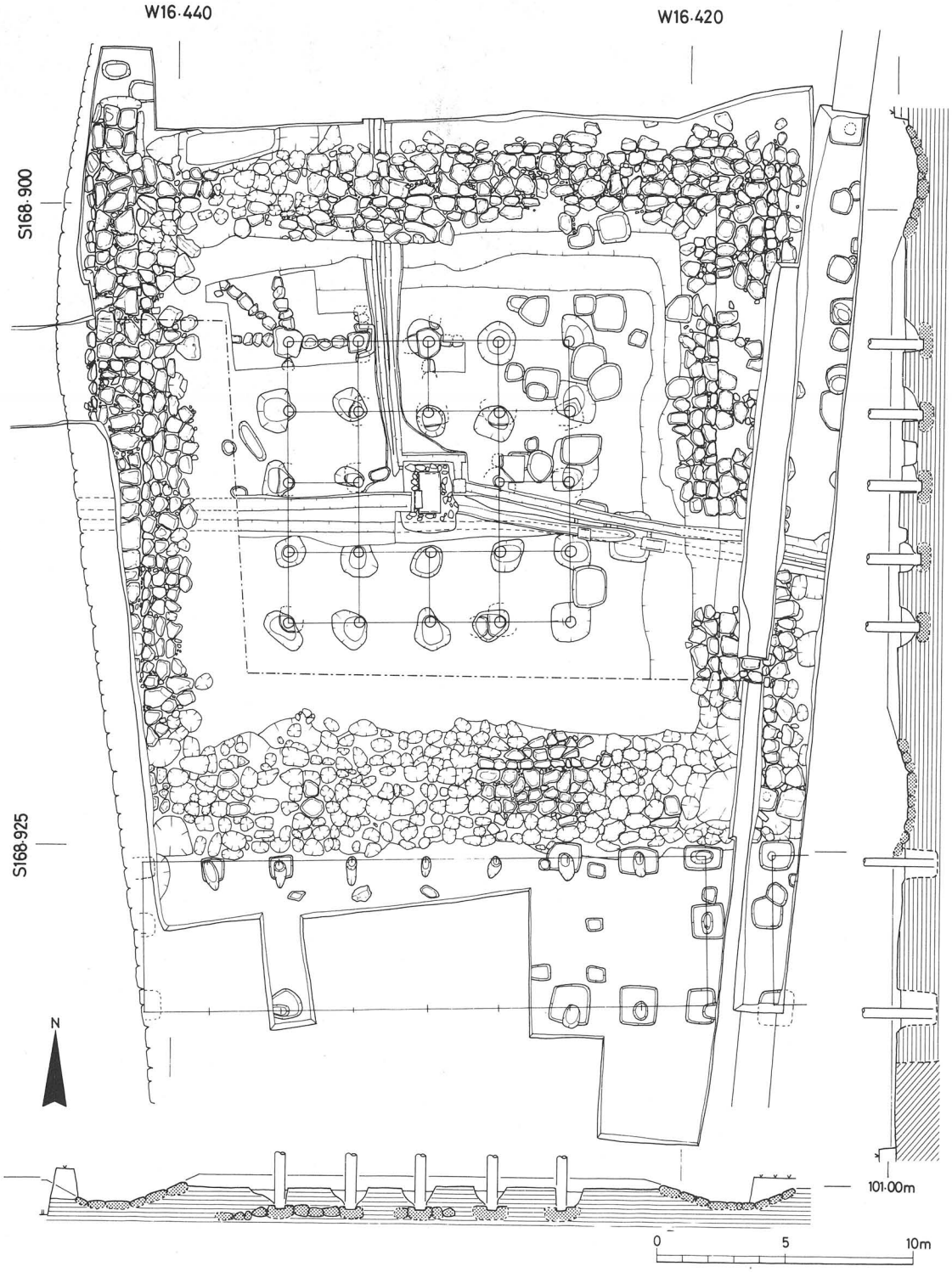
調査位置図（１：4000）薄い網目は小字「石神」

水落遺跡　水落遺跡は昭和47年に飛鳥小学校南の家屋新築に伴う事前調査で発見された。その調査では方形に巡る石組溝状遺構と，その内側の礎石建物の西側柱列，溝状遺構の南外側に接する掘立柱建物の一部を検出した。この石組溝状遺構が一種の基壇化粧とみられ，他に例のない構造であり，飛鳥浄御原宮推定地の一画で発見された７世紀後半代の大規模な礎石建物であることから，昭和51年３月に国の史跡に指定された。今回の調査は史跡整備事業の一環で実施したもので，前回様々な制約から調査し得なかった基壇上面と北・東辺石組溝状遺構を中心に，礎石建物の規模と構造を明らかにすることおよび南の掘立柱建物についてもその規模を明らかにすることを目的として実施したものである。なお，東を流れる吉野川分水路改修に際して一部補足調査を行った。

＜礎石建物＞　基壇上では床土・褐色砂質土の下の灰褐色砂礫層上面で，先に検出した礎石建物西側柱列の東に，径 1.0 ～ 1.2m の不整円形を呈する穴を検出した。この結果，建物が中央を除く総てに柱を備えた４間四方総柱の建物であることが判明した。この穴は深さ 0.8 m の摺鉢形で，底には径40㎝，深さ12㎝の円形凹座をもつ礎石がある。穴はこの凹座に挿入し立てられる柱の抜取り穴である。礎石は一辺 1.5 m の不整方形の花崗岩で，高さ 0.5 m である。平



調査地全景（東から）



水落遺跡遺構配置図（1 ： 250）

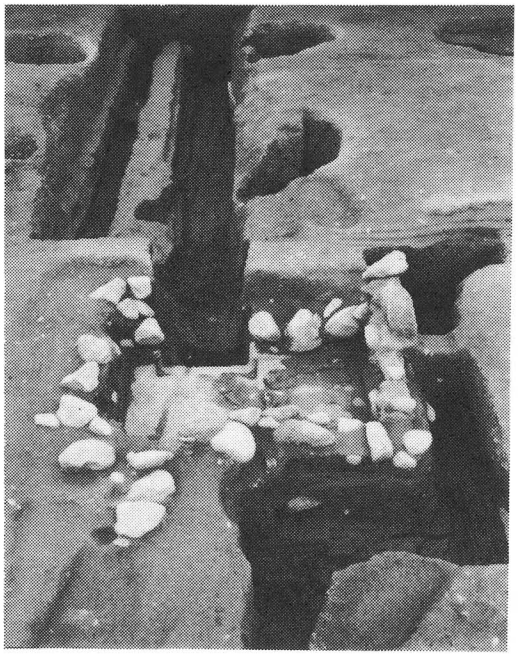
滑に整えた上面に円形凹座を穿つ。建物は礎石凹座心々間で総長10.95ｍ（30尺）四方の正方形で，柱間は各辺とも2.74ｍ（7.5尺）等間である。基壇は飛鳥川の氾濫原を深さ1.7ｍ掘り込み，灰褐色砂土を主体とする土を版築状に積んで作られており，礎石や柱を基壇築成過程に据え付けている。隣り合う礎石間には，径50㎝大の自然石を３～４個連ね，互いに突っ張り合せる。また，柱筋の外側延長線上，対角線上にも，同様の石を５～６個連ねており，地下に据えた礎石のズレに対する配慮の周到さがうかがわれる。このような総柱の地下式礎石を互いに連結させた頑丈な建物は，その工法とともに他に例をみない特異なもので，建物の性格を示すものとして注目される。

礎石と突っ張りの石（北西から）

＜方形石組遺構＞　礎石建物の四周は底幅1.8ｍの石組溝状遺構で囲まれている。これは一種の基壇化粧で，底の内外両辺から約17°～20°の傾斜で立ち上がる側壁は，0.6～1.0ｍ大の花崗岩を内側では３～４段（推定高0.9～1.2ｍ），外側には２～３段（同0.6ｍ）積み上げて作られている。溝内辺が描く方台状基壇の下底辺長は約22.4ｍである。溝底は東南で高く，西北で低い。比高差は約0.4ｍである。西北隅では，底石は北へ1.8ｍ突出しており，そこで西折している。その北端の石には水抜きの溝を彫り込み，水を西方へ抜く工夫がされている。溝埋土は炭化物を多く含む暗褐色粘土であるが，底には灰色粘土が堆積しており著しい流水は考えられず，溝底の傾きとともに，石組溝状遺構が水をたたえるための施設でないことを示している。

＜方台状基壇内の諸施設＞　基壇内では中央の台石上の漆塗木箱・木樋暗渠・銅管を検出した。それらの設置過程については，先ず掘込地業の底に礎石と台石を据え，基壇土で途中まで固めた後に木樋や木箱を据え，更に基壇土を積

みあげて，最後に周囲の石張り化粧をする工程が認められ，建物と一体の施設であることがわかる。



漆塗木箱と木樋（東から）

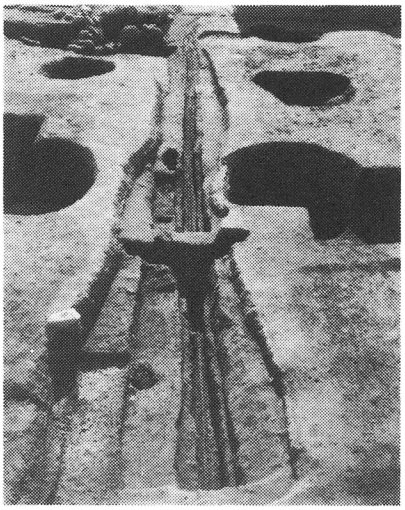
＜漆塗木箱＞　基壇中央では東西1.5 m，南北2.2 m の方形抜取り穴の底で，巨大な花崗岩台石とその上に置かれた漆塗木箱の残片を検出した。台石は南北2.2 m，東西1.6 m，厚さ0.6 mで，平滑に整えた上面の西寄りに南北1.65 m，東西0.85 m，深さ4 cmの方形彫り込みがある。方形彫り込みの西辺南半には南北幅65 cm，深さ17cmの切り欠きが設けられ，その底は西方へ著しく傾斜している。漆塗木箱は台石の方形彫り込みに内接して置かれていたのであるが，木質部分は朽ち果てており，彫り込み側縁に沿って高さ9 cm程の漆膜の立ちあがりがあった他，底面の北半に比較的残りの良い漆膜を認めたにすぎない。漆膜の上には厚さ4 cm程の微細な砂が堆積していた。漆塗木箱の復原には，なお検討を加えねばならないが，現時点では，彫り込み側縁に沿う漆膜が木箱の底材外面に塗布されたもので，底材は厚さ13cmの一枚板と考えている。底面北半の漆膜は一辺37cm程の内法をもつ木箱の可能性がある。方形彫り込みの外側の台石上には，20～30cm大の自然石が2～3段積み上げられ，内側がほぼ木箱外面に揃っている。これは基壇中に木箱を固定する裏込め石にあたると考えられる。

＜木樋暗渠＞　漆塗木箱を中心にして，西・北・東に木樋暗渠が通っている。東の木樋は2本あり，うち先ず南側の木樋についてのべる。基壇内での残りは悪く，幅0.35 m，深さ0.18 mの粘土化した木質を検出した。東辺の石組溝の下を通って敷設され，東外辺斜面外側の吉野川分水路改修時の補足調査では良く残っていた。木樋は外法幅49cm，同高42cm，内法幅21cm，同高30cmであり，断

面をU字形にくりぬいたもので，底部と両側を基壇土で取り巻くように固めている。底には厚さ5cmの青灰色粗砂が堆積し，流水の痕がうかがわれる。この木樋は方台状基壇中央台石の南を通り，基壇西辺外方へ抜けている。次にこの北0.7mに並走する木樋も大半が粘土化し，底部がわずかに残る程度であるが，先述の木樋と同規模と考えられる。この木樋は台石の東に向って敷設されているが，西端には南北55cm，東西45cmの角材が垂直に埋められている。水量調節の桝とみられる。木樋は東西14.5m分を検出したが，底は西で低く，33cmの差がある。この木樋には桝の東1.8mの建物入側柱の位置に南接して大銅管が蓋材に挿入されている。大銅管は径3cm，蓋材に埋め込まれた末端部分が最大径6cm，木樋内に突き出した先端で4cmの太さであった。末端から長さ35cmで折損しているが，当初は柱材に沿って基壇上へ延びていたとみられる。木樋は桝から台石を迂廻するように，北へ0.75m，西へ2.5mの2本の短い木樋を連ね，台石の西北で南北に長い木樋に継いで基壇北辺外方へ延びている。いずれも幅24cmの底の部分の木質が残り，上面には白色粗砂の堆積がある。南北の木樋は長さ13.4m分を検出したが，南端での高さは基壇検出面下1mであり北端より11cm高い。基壇西方に延びる木樋は，台石南を通過する木樋の北に平行して敷設されている。南の木樋と一連に，幅1.8m，深さ1.3mの掘形を掘って敷設され，中央台石の切り欠きから基壇西辺の石張りの下を通って西方へ抜かれている。幅0.6m，深さ0.35mの粘土化した木質が残っている。この台石に取り付く木樋は，他よりも幅広く，南の木樋より急傾斜で西方へ抜かれていることから，一度に大量の水を抜くための工夫と考えられる。

＜小銅管＞　漆塗木箱の西から北へ小銅管が敷設されている。小銅管は外径1.2cm，内径0.9cm，長さ80cm程の管を継いでいる。外側は3cm幅の木で被覆され，内法幅10cmの木樋に納められている。南北の木樋に沿って敷設されるが，中央付近では重複し，木樋埋設後に幅20cmの溝を掘って通していることがわかる。漆塗木箱付近では基壇検出面上に露出しており，南端は削平され明らかでないが，木箱北端から20cm南の位置まで痕跡がたどれる。そこでは木樋底から70cmの高さにある。北方では木樋と同じ高さに並んで，石組底石の下を通って

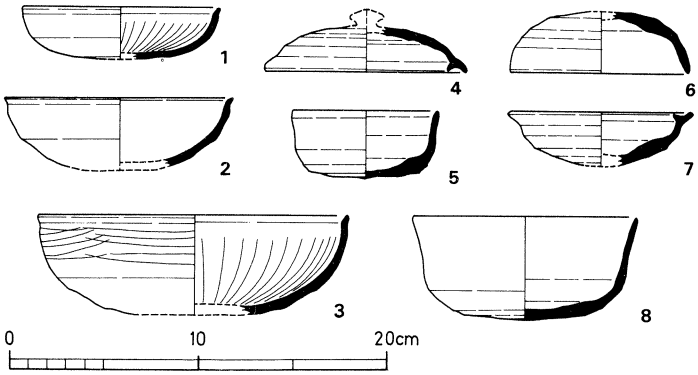
いる。長さ 14.1 m分を検出したが，比高差は約73㎝で，木樋より著しい傾きをもつ。


小銅管と木樋（北から）

＜掘立柱建物＞　昭和47年の調査で北側柱列6間分を検出した建物は，東の妻柱列を検出したことにより桁行8間（総長約22 m），梁行2間（同 5.8 m）の東西棟と判明した。方1.5 mの柱掘形をもち，柱間は両脇間が若干狭い他は礎石建物とほぼ等しい。南側柱列の南 2.5 m の位置を南端とする一帯の掘込み地業によって築成した基壇上に掘形を穿ち，柱を建てた後に化粧の石張りをしていることから，礎石建物と一連の建物である。石張りは北側柱に接する位置にまで及び，基壇は石組溝底から 0.6 m の高さと推定される。これは方台状基壇推定高より約 0.3 m低い。東の補足調査では東妻柱列の東 2.4 m の位置に南北に並ぶ 3 個の柱穴を検出した。柱掘形・柱間ともに同規模であり，柱筋を揃えた東西棟であろう。掘立柱建物の内側には一辺60㎝の柱掘形や石が並び，建物の床束ともみられるが明らかでない。

＜遺構の性格＞　以上のように礎石建物の中には，木樋暗渠，漆塗木箱等の水を用いる施設が存在し，それらは基壇築成に合せて敷設された一連の施設であることが明らかになった。水の流れを復原してみると，東方の木樋を通じて導いた水は，台石の東に設けた桝を閉じることで水圧を上げ，蓋に挿入した大銅管を通って基壇上に導かれる。余水は桝から北へ木樋を通って基壇北へ排水される。基壇上の水は漆塗木箱へ集まり台石の切り欠きから西の木樋を通って一気に排水される。漆塗木箱上には極く微細な砂が堆積し，木樋底の粗砂と比べる時，基壇上では水篩をした清浄な水を必要としたとみられる。これら周到な配慮工夫のなされた水利用の施設と，それらを埋設した頑丈・精緻な礎石建物は漏刻（水時計）とそれを納めた漏刻台と考えるのが最も妥当であろう。中国古代の漏刻は，既に周代からその使用が知られ，唐代には漆塗木箱を水槽とし，細い銅管で連結したサイフォンの原理によってしたたり落ちる一定の水量

を測る仕掛になっている。我が国の漏刻は『日本書紀』斉明6年5月条に初見するが，奈良・平安時代にもその備えのあったことが知られる。『延喜式』には漏刻の鐘を撞く松木，凍結防止用の木炭の他，水篩用の曝布の必要なことが記されており，検出遺構の特色と一致する。『日本書紀』天智10年条に「漏刻を新台に置く，始めて候時を打つ，鐘鼓を動かす」と記されるように，建物が総柱礎石建ちの一種の楼閣建築であり，規模と頑丈さを考えると，一階に漏刻を，二階以上に鐘鼓を置いたと考えられる。平安時代に降るが，『中右記』の記録では陰陽寮の鐘楼には漏刻の他，渾天図等が備えられていたことが知られ，この建物の中に天文機器を置いた可能性もあろう。



出土土器（1～7：石組堆積層，8：木樋直上）

＜その他の遺物＞　礎石建物の東北部を中心に，方0.8mと方0.4mの大きさの柱穴がある。礎石建物の柱の間をぬって掘られており，2.8m等間の柱間を復原できるが，塀か建物かは不明である。いずれも埋土に黄色粘土が混じる共通した特色を示し，礎石建物抜取り穴をこわしたり，基壇化粧石張り埋土の上から掘り込まれ，基壇建物廃絶後に造営されたことがわかる。昭和47年の調査では，本調査区北東隅のトレンチを中心にして，7世紀中葉の土器に混じて7世紀後半の土器が少量出土しており，これらの柱穴と関わる可能性が高く，礎石建物等の廃絶と周辺地域の大規模改変の時期を示すものとして注目される。

＜遺物＞　基壇化粧石組溝の堆積層，木箱抜取り穴等からは多量の炭，フイゴ羽口，スラグとともに7世紀中葉の土器が出土した。また木樋直上からも7世紀中葉の須恵器杯が出土し，遺構を斉明6年（660年）に中大兄皇子が造った漏刻とみることと矛盾しない。炭，フイゴ羽口，スラグの性格については前回調査時出土遺物を含め今後の整理の結果を待ちたい。なお，飛鳥寺軒丸瓦を

含む瓦類がわずかに出土しているが，瓦葺の建物を想定できる量ではない。

＜まとめ＞　上述のように，方台状基壇に営まれた礎石建物とその内部施設は，漏刻と漏刻台であるとの結論を得た。しかも『日本書紀』斉明6年5月条に記される中大兄皇子が造った漏刻にあたると推定されるものである。漏刻の具体的な構造をはじめ，南の木樋の機能や導水元，小銅管の行く先，および遺物の性格と帰属など解明すべき課題は多い。しかし，今回の成果が広く飛鳥とその時代を理解する上で大きな鍵となることは確かなことであり，今後の検討と周辺地域の調査を期したい。

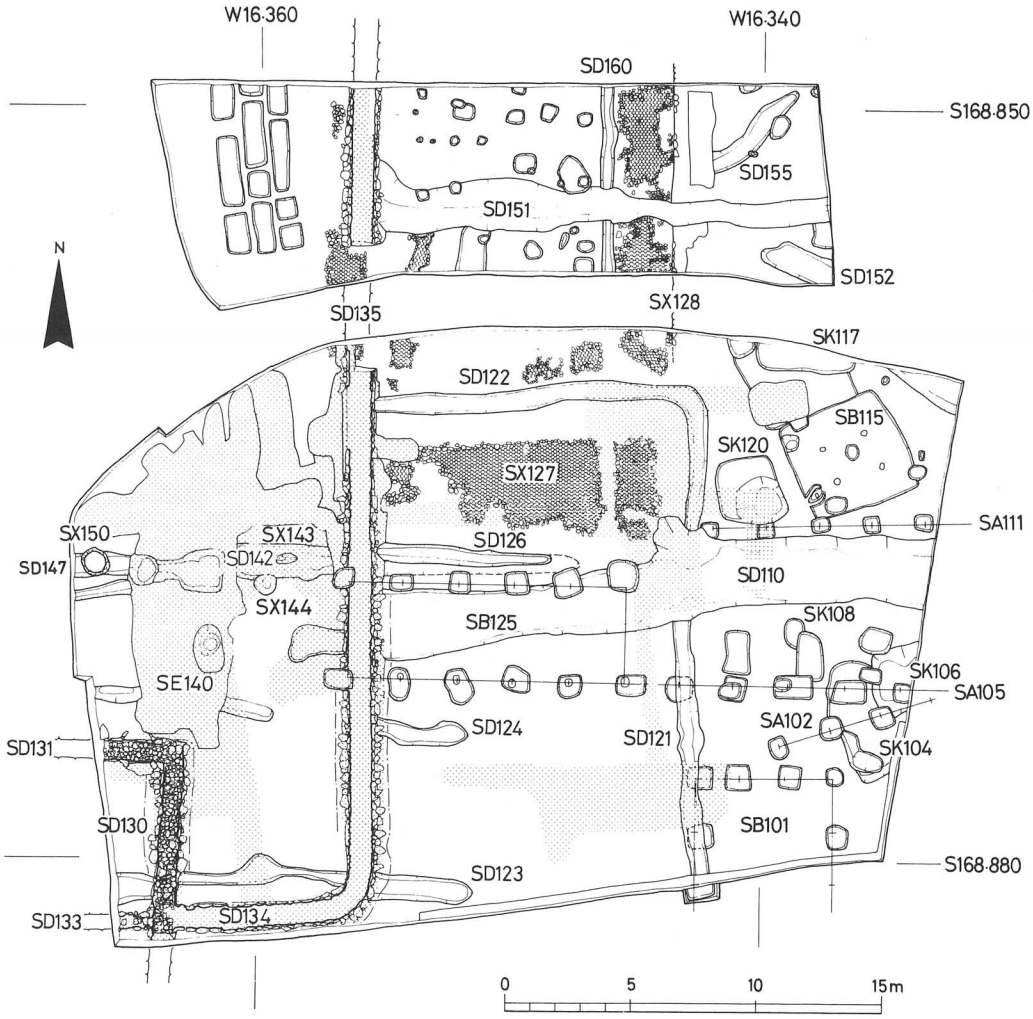
石神遺跡　旧飛鳥小学校の東にある6筆の水田は小字「石神」の名で呼ばれ，その東南部の不整形な水田が明治35年に「須弥山石・石人像」の石造物が出土した水田である。水田西北隅の石造物出土地点を中心として，昭和11年春には石田茂作氏らによって部分的な調査が行なわれ，出土地点をめぐる位置に石組溝があり，その東方に石敷遺構のあることが確認されて，石造物が石組溝をめぐらした庭園の噴水施設であり，年代的には斉明3年・同5年条にみえる「甘樫丘東川上」「飛鳥寺西」での須弥山造立の時期にあたるとされた。またこの成果は旧飛鳥小学校の北にある石敷とともにこの地域を飛鳥浄御原宮に推定する一つの有力な根拠ともなった。その後，昭和47年の飛鳥水落遺跡の発見に続き，昭和52年には飛鳥寺北大垣が確認されて，この水田が飛鳥寺寺域の西北隅にあたることが判明し，この地域を「飛鳥寺西槻木」の広場の一画に含める見解も出された。またその成果によって，飛鳥寺西門の前を通る中ッ道と壬申の乱の記事に登場する「飛鳥寺北路」の交点が，この水田の東南部に想定されることになるなど，新たな視点による全面的な調査が必要になってきた。そこで，今年度から開始する飛鳥浄御原宮推定地の本格的な調査の一貫として，今回は石造物出土の水田全域とその北の水田を対象とし，昭和11年の調査を再確認することで解明への糸口をさぐることとした。

調査地の層序はその東半では上から耕土・床土・褐色砂質土・黄色粘土・灰褐色砂礫であり，黄色粘土以下が地山である。西半では自然流路にあたる砂礫層が黄色粘土を流失させて厚く堆積しており，遺構は灰褐色砂礫面で検出した。

＜遺構＞　昭和11年の調査（以下，S.11調査と略す）で検出された石組溝と石敷遺構のほかに，掘立柱建物，掘立柱塀，溝，土壙，竪穴住居などがある。大きくⅠ（７世紀代），Ⅱ（奈良・平安時代），Ⅲ（６世紀以前）の３つに分けられるが，主にⅠの遺構について概略を記すことにする。

Ⅰ．７世紀代とみられる遺構はさらに，その重複関係や出土遺物によって，前半～中葉の遺構（Ａ）と，後半代の遺構（Ｂ）およびどちらとも決め難い遺構（Ｃ）とに分けられる。

Ａ）S.11調査で検出された石組溝などがある。ＳＤ 130 は調査区西南の南北溝で幅 0.8 ｍ，深さ 0.7 ｍ。調査区南端から12ｍ北で西折し，同規模の石組溝



石神遺跡遺構配置図（１：300）網目は昭和11年調査トレンチ

ＳＤ131となる。ＳＤ131は調査区西端までの2.8ｍ分を検出した。S.11調査では約20尺西方で北折し，南北石組溝ＳＤ132となることが確かめられている。幅1.5ｍの掘形内に幅50㎝，高さ60㎝の一枚石をたてならべて側石とし，底には20㎝大の玉石を敷く。側石上端の納め具合から検出面がほぼ旧状の高さを示す開渠とみられる。溝内堆積層についてはS.11調査時に完掘されていて明らかでない。ＳＤ131がほぼ真東西方向に通っているのに対し，ＳＤ130は北で東に約3°振れている。この振れは南の水田畦畔の振れに近似しており，ＳＤ130がなお南へのびて，飛鳥川からの導水の位置を占めることを暗示するものとして注目される。

ＳＤ130・131（北から）

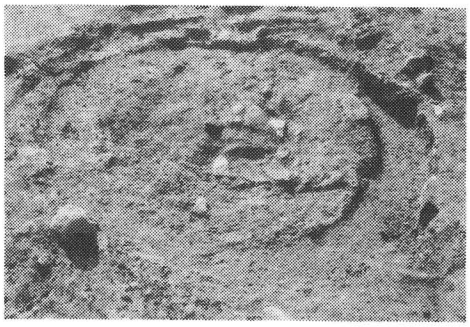
ＳＤ130の南端西方に取りつくＳＤ133は幅45㎝，深さ45㎝で，他の溝より小さいものの，一枚石をたて並べる点では共通する。底には40×25㎝大，厚さ20㎝の矩形の石を西から東へ段々に下げて石畳としている。東端の底石とＳＤ130の底石とは25㎝の差をもつ段をなしている。

ＳＤ130の東にはＳＤ133と南側石をそろえた位置にＳＤ134が取りつく。ＳＤ134は幅0.9ｍ，深さ0.8ｍで東へ7ｍのところで弧を描いて北折し，ＳＤ135となる。ＳＤ134の側石は西半の4石ほどは大型一枚石をたて並べ，東方ではやや大型の石の上に2～3段の小型の石を横積みにしている。底石はなく，抜取り痕跡もみられない。ＳＤ135は調査区北端までの33ｍ分を検出したが，S.11調査では南端から140尺のところで北北東に向って曲がることを確認している。幅2ｍの掘形内に40㎝大の自然石を3～4段横積みにして側石としている。溝内の大半は完掘されていたが，北半に掘り残された部分があって，堆積層が確認できた。溝堆積層は底から5㎝ほどの灰色細砂と50㎝の厚みをも

つ灰色粗砂であり，激しい流水のあとをうかがわせる。また，その上は暗褐色粘土で埋められ，さらには厚さ15cmの整地土を介して後述する石敷遺構が営まれている。堆積層および埋土からは7世紀中葉の土器（1）が少量出土した。

これらの溝は大規模な計画の下に広範囲にめぐらされた一連の導・排水施設であるが，底石の有無や側石の用材法にみられるように，SD130以西の溝とSD134・135とでは若干の性格の違いが推測される。なお，各溝の底はSD131西端を0とした場合，SD130北端が－2cm，同南端が－5cm，SD133東端が＋14cm，SD134東端が－15cm，SD135北端が－37cmとなっており，S.11調査ではSD132→131→130→134→135の順に，あたかも石造物出土地点をめぐるような水の流れを推定している。

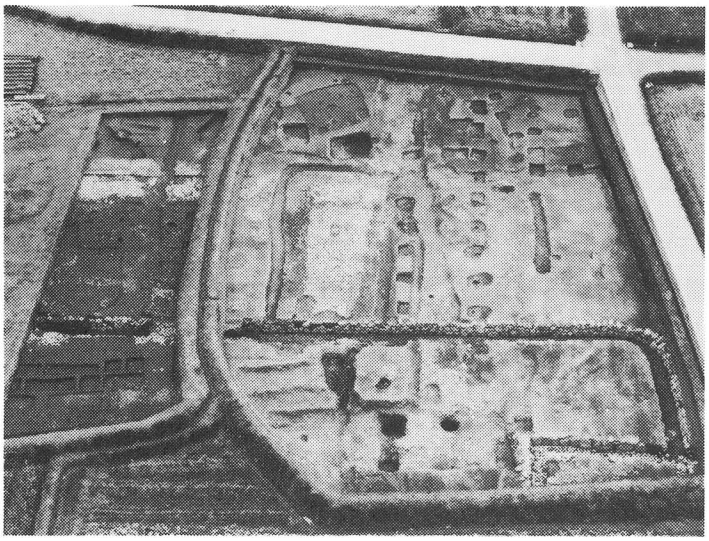
ところで，これら石組溝と密接に関わる石造物の出土地周辺は，S.11調査のトレンチが深くおよんでいて，当初の状況は確認できなかった。ただ幸いにもS.11調査のおよばなかった部分で花崗岩石造物の痕跡SX150・144を検出した。SX150は幅7～14cmの花崗岩薄層が1.2～1.0mの不整形な輪状に残ったものである。水田西北隅の床土面から掘り込んだ穴の底にあり，これが明治35年出土時の痕跡であることは疑いない。その形状を出土石造物の各部と比較した結果，「須弥山石」の第一石目の上端に酷似することが判明した。出土当時すでに天地逆の状態であったことを示している。SX150の下で検出した東西溝SD147からは7世紀後半の土器が出土し，SX150の上層に瓦器が含まれることから，原位置から出土地への移動は8～12世紀の間のこととみられる。SX150の東方6mにあるSX144については，東西に相接して並んでいたとされる「須弥山石」の第二・第三石目あるいは「石人像」の痕跡と考えられる。いずれにせよ，これら石造物の原位置はさほど遠方にあるとは考え難い。



SX150（東から）

B）　7世紀後半の遺構には，石敷遺構SX127，石列SX128，掘立柱建物SB125，塀SA105，土壙SK127な

どがある。ＳＸ127は石組溝を埋め，整地したのちに20㎝大の玉石を敷きつめている。後世の溝や流路などでこわされ虫喰い状に残る。石敷東端は西に面をそろえた石列ＳＸ128で区切られる。その東方は一段高く，そこには石列以前の斜行溝ＳＤ155や152のほか石列以東の整地に伴うとみられる土壙ＳＫ117がある。ＳＫ117からは７世紀後葉の土器（７）が出土した。ＳＸ127は所々に不等沈下による凹みをもちながら，東南から西北へわずかに傾斜して石組溝の西方にまで広がっている。ＳＸ144と重複する東西溝ＳＤ142は幅1.3ｍ，深さ0.4ｍの素掘り溝で，埋土から７世紀中葉の土器（２）が出土した。この溝の中にある石列ＳＸ143は南に面をそろえて並ぶ２個の石であり，石敷の南を区切る施設とみられる。ＳＤ142は石組溝の東にも延びており，石組溝の埋めたて後，石敷遺構の造成に伴う整地に関わる遺構と考えられる。石敷は東西16ｍ以上，南北19ｍ以上の広がりをもっていたことになる。



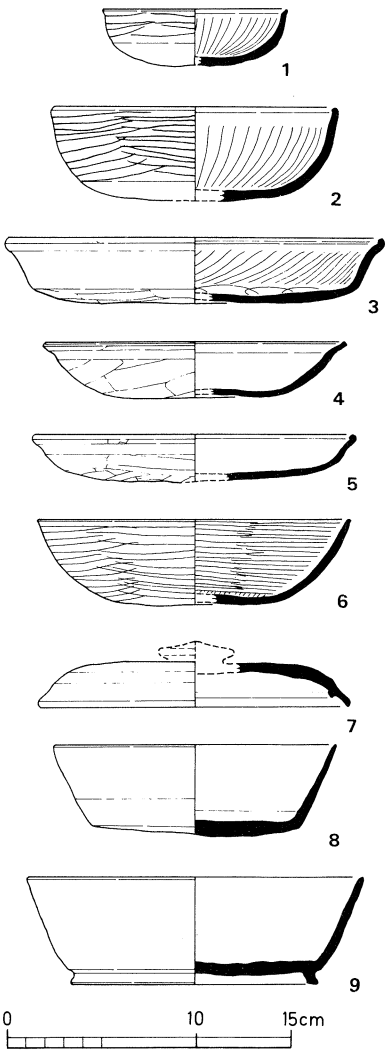
調査地全景（西方上空から）

石敷の南にある掘立柱建物ＳＢ125は桁行５間，梁行１間の東西棟で，桁行柱間2.2ｍ等間，梁行柱間は3.8ｍである。方1.8ｍ，深さ0.8ｍの掘形で，南側柱列には径20㎝の柱痕跡がある。西端の柱穴が石組溝ＳＤ135の西側石をこわして掘られており，石組溝よりも新しい建物であることがわかる。また，東妻柱列が石列ＳＸ128の南延長線の西1.8ｍに，北側柱列が石列ＳＸ143の東延長線の南0.9ｍの位置にあり，全体として石敷遺構の南面を塞ぐ位置にあって，互いに関連をもつものと考えられる。ＳＢ125の南側柱列に取り付く掘立柱塀ＳＡ105は，５間以上の東西塀で柱間は2.2ｍ等間である。ＳＡ105の

柱穴は，７世紀後半でも新しい頃の土器（８）を含む溝ＳＤ121・122にこわされており，これらの遺構の年代を７世紀後半でも比較的古い頃とみることができよう。

Ｃ）　その他７世紀代とみられる遺構には，掘立柱建物ＳＢ101，掘立柱塀ＳＡ111，ＳＡ102がある。ＳＢ101は調査区東南にある梁行３間，桁行２間以上の南北棟で，柱間は梁行が1.76ｍ等間，桁行2.1ｍ等間である。西側柱がＳＤ121にこわされる点ではＳＡ105と同じだが，ＳＡ105の柱穴埋土に７世紀後半の土器が含まれ，この建物の柱穴出土土器が６世紀代に限られる点から，７世紀代でも前半にまで遡る可能性をもつ。ＳＢ101の北10ｍにある東西塀ＳＡ111も同様の特色をもち，柱間2.1ｍ等間で４間分検出した。

ＳＢ101の北にある塀ＳＡ102は柱間2.1ｍ等間で２間分検出した。真北に対して東で北へ約17°40′振れている。時期は不明である。



出土土器（１：ＳＤ135，２：ＳＤ142
４～６：ＳＫ120，７：ＳＫ117，
８：ＳＤ121，３・９：ＳＤ110）

Ⅱ．奈良平安時代の遺構には調査区北半にある小柱穴群，土壙ＳＫ120，自然流路ＳＤ110のほか，約７ｍの間隔で並んで西流する東西溝ＳＤ123・124・126・151および南北溝ＳＤ160がある。ＳＫ120は隅丸方形の穴の南寄りが径２ｍ，深さ1.3ｍの円形に深く掘られている。多量の炭が混じる埋土からは，平安時代初めの土器（４～６）のほか瓦類，施釉陶器，土馬，金銅製飾金具などが出土した。自然流路ＳＤ110は幅３ｍ，深さ70㎝で西南に著しくあふれ出している。粗砂を主とする堆積土には，奈良時代中葉から平安時代前半を主体とする土器（３・９）とともに，飛鳥寺の瓦類，基壇化粧

の凝灰岩切石などが出土した。飛鳥寺の北辺をえぐって流れ込んだものであろう。調査区北半の小柱穴群は重複関係から，石敷→ＳＤ160・柱穴群→ＳＤ151の順序が知られ，出土遺物からは９世紀～10世紀代の遺構とみられる。なお，この時期の遺物を多く含む砂礫層が南半を厚くおおっている。

Ⅲ．６世紀以前の遺構には，弥生時代の土壙と古墳時代中期の竪穴住居がある。ＳＢ115は東西4.6ｍ，南北4.2ｍの規模で，西南部壁寄りにカマドがあり，西・南には製塩土器を含む貯蔵穴がある。５世紀後半の土器が出土した。土壙ＳＫ104・106・108からは炭化物とともに弥生時代前期末葉の土器が多く出土し，歯牙の破片もみられた。

＜まとめ＞　S.11調査で検出された石組溝は７世紀中葉の遺構であり，近在する石造物の原位置を含めた大規模な計画の下に造成されたものである。石造物の構造は，庭園に造立された噴水施設とみられるもので，斉明朝の須弥山造立記事を想起させる。なかでも小字石神の名とその広がりに注目するとき，斉明６年（660年）の「石上池辺」での造立にあてることができよう。また，斉明紀同条に記される漏刻の遺構である水落遺跡と年代・位置ともに深く関わっていることは疑いないところであろう。

石敷遺構は，前身遺構を埋めたてて営まれており，年代的には飛鳥浄御原宮の営まれた７世紀後半に位置づけられる。検出した遺構を直ちに宮殿に関わるものとすることは難しいものの，水落遺跡においても７世紀後半に大改変が認められることから，広範囲で大規模な一大改変が７世紀後半のこの地域で実施されたことが知られ，その主たる要因を浄御原宮造営に求めることもできよう。

調査区内を通ると想定した中ツ道に関する遺構は，検出されなかった。その想定位置にあたる石敷・石列についても，前面を塞ぐ位置に掘立柱建物があるなど問題が多く，中ツ道の存否を含めて，結論を得るに至らなかった。

これらの課題は，飛鳥寺・水落遺跡・浄御原宮ばかりでなく，重複し，併存する飛鳥とその時代の遺構全体の理解と深く関わる課題である。その解明にはなお長期にわたる調査と検討を要するものである。来年度に予定される石神遺跡の北半の調査をはじめとして，周辺地域の調査成果に期待したい。